

所 感

今 村 正 義

近代事業経営における企業発展の基盤は、研究活動に依存するところがすこぶる大である。

デュボン社、ヘキスト社、モンテカチニー社のような一流会社はいわずもがな、新時代の波に乗って伸長発展をとげた有力会社は、いずれも営業利益の相当部分を研究投資にふり向け、基礎研究、応用研究、企業化研究を貫く一連の研究組織を確立して、新規企業の研究開発にたくましい意欲を示している。

研究こそは、もっともよい投資であり、そしてプロフィタブルなものである。

従来わが国では、先進国の完成された技術を輸入して生産をはじめた方がてっとり早いという思想があり、とかく研究投資をひかえめにするという傾向があった。しかしながら、世界市場において互角の競争をいどむためには、どうしても各社独自の技術を完成することが必要であり、研究投資についても新しい角度から検討しなければならない時期に直面している。

ここに「東洋曹達研究報告通巻第6号」発刊にあたり、創刊当時研究部長の職にあつて、編集に関係したものの一人として、あたかも播いた種が発芽して、すくすくと苗が成長しているのを見るような気がして、一しおの愛情を感じている。

あえて一文を掲げて、所感をのべ、あわせて研究員諸彦の健闘を祈るものである。

(当社取締役・第一製造部長)